

ロクでなし魔術講師と
禁忌教典：ただ正義の魔
法使いになりたかった2
人

ないすう～～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界では本の中のおとぎ話のような

正義の魔法使いになりたかった者たちの物語であり。

またその者たちに関わっていく人々の物語である。

笑いあり、涙あり（本当？）、恋愛ありの物語が今はじまる。

主人公はチートでありこの作品自体も作者の自己満作です。

どうか温かい目でみてやってください、お願いします。

誹謗中傷はお断りですわ！（なぜ最後はオネエ？）

ヒロ「俺の夢はいつかルミアと女王と母○井すr『少し黙っていてくださいね（殴）』。
ひ、ひやいへしゆ、しえらはん」

セラ「当たり前です。オープニングからなんてこと言うんですか。

・・・私がいるのに・・・ブツブツ」

ヒロ「えっ？なんか言った？セラ？」

セラ「・・・もういいです、それではみなさん、お楽しみください」

目次

原作1巻

再会とロクでなし | 1

やる気のない非常勤講師と、子猫と子

犬 | 12

ほんの少しのやる気 | 31

愚者と世界と黒い死神 | 47

後日談 | 57

原作1巻

再会とロクでなし

少し小高い丘の上に建っている屋敷の早朝の一風景、

「なんつーかき、俺、働いたら負けだっと思って思うんだよね

お前のおかげで俺は生きている。お前がいてくれて本当によかった」と金髪赤眼の女性、セリカ・アルフォニアに言った。

そしてセリカは「ふ、そうか。死ねよ、穀潰し」と毒を吐くが、顔は微笑んでいた。

「セリカは厳しいなあ〜！　．．．あ、おかわり」と空になったスープの皿をセリカの鼻先へ突きつけた。

「清々しいな、お前は」

「普通、働きもしない居候って、もうちよつと謙虚になるもんな」

「あー、今日のメシは少し塩味がきつかったぞ？　俺はもつと薄味の方がいいね」とグレンは言った。

「その上、ダメ出しとは恐れ入る」としばらくセリカは笑い

「《まあ、とにかく、爆ぜろ》と奇妙な呪文の三節詠唱をすると

爆発でグレンが吹き飛び転がっていくのが見える。

「ば、馬鹿野郎！お前、俺を殺す気か!？」

「殺す？違うぞ、ゴミをかたす行為は掃除と言うんだぞ、グレン」

そんなことを言っていると、不意に屋敷の扉が開いた。

「帰つてきたよー母さん」とセリカに瓜二つの顔をした青年が入ってきた。

途端にセリカは「おおー来たかー、相変わらず可愛いやつだなく、ヒロー」と息子を抱き寄せていた。

「母さん、苦しいよ」と言うがセリカの立派な双丘に頬擦りして満足そうな顔をしている。

「なんだ、1年前から一人暮らし始めて、母さんは寂しいんだぞー。

お前は週末にしか顔を見せないんだから、少しはイチヤつかせろー」と歳不相応なことを言っているのは愛嬌だ。

そこへ「・・・あのー、俺いるんだけどー」と空気のグレンは言った。

もはや空気のグレンへ向け『いたんだ（まだいたのか）?』とゴミのように2人から見られ

「せめて、人間の扱いしてください」っと泣きそうに言った。

「魔術講師として働いてもらおうと思つてな、お前の能力なら問題ないはずだ」

それから少々いざこざがあり、グレンは2人をキレさせ

『《其は摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象は理を紡ぐ縁は乖離せよ》』と早口で2人は呪文を紡ぎ、放つた。

グレンのかたわらを特大の波動が駆け抜けていき、2人は『ち……狙いが甘かつたか』と言ひ

グレンは口をパクパクさせ硬直していた。

「次は外さん……《其は摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象と理を……》」
「ま、ママあああああああー!?!」

こうして半ば強引にグレンの再就職先が決まったのであつた。

そして「ヒロ、お前もついでにグレンの補佐を頼んだぞ」とセリカは笑みを浮かべた。

ヒロは絶望した顔で「俺の楽して、キャツキヤ、ウフフ、生活があああああー」と言つて気絶した。

それからしばらく後、

「ルミアアア、遅くなってごめん」

「もうルミアアったら律儀なんだから、先に行つててよかったのに」

「うっ、そんな・・・お嬢様を置いていったら、しがない居候に過ぎない私は、旦那様と奥様にお叱りを受けてしまいます」

「馬鹿、冗談でもやめてよね、私たちは家族なんだから」

「あはは、ごめん、システイ」と可愛く舌をべろつと出しておどけた。

その一方ある家では

「お姉ちゃん、行つてくるね」

「うん、いつてらつしやい、ユウナ。忘れ物しないでね」

「もう、お姉ちゃん心配しすぎ」

「そう言えば、今日からユウナのクラスに新しい講師が来るのよね？」

「うん、そうだけど？どうして？」

「うんうん、なんでもないよ。・・・いいこと起きるかもよ？」と微笑んで言つた。

そして（2人とも立ち直つたのかな？だとしたら私はうれしいかな）と女性は妹の後姿を見ながら呟いていた。

システイたちへ戻り

2人で談笑しながら通学路を歩いていると

「うおおおおおおおおおおお、どけどけえー」と目を血走らせながら走っている男と

「待ちやがれ、グレン、人に朝食代払わせやがって。今日こそ許さんぞ。

《世の理よ・よことわり全てを拒絶し・すべ森羅万象をな為せ》

「ば、馬鹿野郎、それお前の固有魔術の《悪魔の魔術》じゃねないか。俺をこの世から

消す気か!?

「パパあああああー」

「パパって呼ぶんじゃない、キモイぞ。あと俺はお前と同じ年だあああああー」

と朝から街中でバカ騒ぎをしていると、グレンの目の前に女子生徒二人があたふたとしていた。

「な、何イイイイいつ!?ちよ、そこ退けガキ共おおおおおー」

「お、《大いなる風よ》とシステイは黒魔《ゲイル・ブロウ》を唱えた

そして男は宙を舞い噴水へと見事着水した。

そして「お嬢さんたち、ありがとうこのグレン^{馬鹿}を止めてくれて」と頭を下げて礼をいい、女性たちを確認すると

システイが「・・・あっ!? あんた、ヒロじゃない」

「・・・違います、人違いです」とスルーを決め込んだ。

「私が間違えるわけないじゃない、この四年間何してたのよー」顔を真っ赤にし怒っていた。

そんなことも気にせずヒロはルミアの方へ行き、

ルミアが「あの、私に何か付いてますか?」と聞くと

「いや・・・お前・・・どこかで」と言いながら体中を舐め回すように見ながら体と触り、最後に後ろへ回り胸を揉みすると

ルミアから「キャン」と可愛い声が聞けて満足していると。

「ちよ、ちよっと、あんた何どさくさに紛れて胸揉んでんのよ、この変態」と言いシステイはヒロを蹴り飛ばし

壁へ顔をめり込ませた。

そしてずぶ濡れのグレンは立ち上がり「ありがとうお嬢さん、ヒロを倒してくれて。あと今何時か教えてもらえませんか？」

まだ時間があるのを確認するとグレンは逃げていった。

一方ヒロは「いつてえ、誰だよ、こんな紳士でイタイケのお兄さんを蹴り飛ばす奴わ」

「誰が紳士でイタイケよ、この変態！」とシステイはジト目を向けながら言った。

「・・・ん？シス・・・まな板じゃないか！久しぶりだな。相変わらず胸はc h『うるさい、この変態』』と言い

システイはまた蹴り飛ばした。

胸を腕で隠しながら「いま絶対わざと名前間違えたじゃない。あと人の気にしてること言つて」と怒っていた。

それからブツブツと文句を言っていると、

ルミアが「・・・システイ、あの男の人・・・逃げていったよ？」と苦笑いしながら逃げた方へ指をさしていた。

それから学院の教室へと場所は移り、

「……遅い」とシステイは怒っていた。

「確かに、ちよつと変だね……」とルミアも首をかしげる。

それからしばらくすると

「……あゝ、わりいゝ、遅れたわ」と呑気に教室へと入ってきたのだ。

「やつと来たわね！ちよつと貴方、一体どういふことなの!? 貴方にはこの学院の講師としての自覚は……」

システイーナは男を確認すると

「あ、あ、あああ、貴方は!？」と朝あつた男であることに驚いていると。

「……違います、人違いです」とスルーの態勢へ入った。

「……う、嘘、グレンお兄ちゃん？」とセニカが言うと

「……つげ、ユウナか? ……久しぶり……だな」と顔を引きつつっていた。

「ていうか、貴方、あの状況からどうやったら遅刻できるというの?」

「そんなの時間にまだ余裕があつたから、公園で居眠りしてたからじゃん?」と言うと

「なんか想像以上に、ダメな理由だった!」とクラス中からジト目を向けられるグレンであった。

それからまたしばらくすると、

ドアを蹴破り「悪い悪い、遅れたわ。間に合うはずはずだったのに、途中であの女に出くわして説教されてたら遅れたわ」

「……っえ!? ヒロお兄ちゃんまで!」

お兄ちゃんと呼ばれ、呼ばれた方を見ると

「……っげ、ユウナか。久しぶりだな。さつきお前の姉ちゃんに説教されてたところだぞ」

システイーナは入ってきたもう一人の男を見ると驚いた。

「……なんでヒロがここにいるのよ!」

ヒロはシステイーナを見ると「……違います、人違いです」と答えスルーの態勢へと入った。

「また同じこと言われた!? それよりも貴方みたいな人がそういてたまるものですか。」

あと、貴方も、遅刻した理由が、予想以上にダメじゃない」

「えー、グレン||レーダスです。本日から一ヶ月間、生徒諸君の勉学の手助けをさせてい

ただきます。

短い間ですが、これから一生懸命頑張ってください」と挨拶し

「えー、ヒロ＝アルフォニアです。こいつの助手です。……以上です」と言う生徒が全員ずっこけた。

システイーナが「早く授業始めてください」と言い、授業が始まるのかと思いきや

グレンとヒロが何やら小声で打ち合わせし、グレンが

「よし、早速始めるぞ……一限目は魔術基礎理論Ⅱだったな」

そして助手のヒロがとても綺麗な字で黒板に自習と書いて2人は居眠りの態勢を取ったのであった。

やる気のない非常勤講師と、子猫と子犬

グレンとヒロが非常勤講師として来てから数日が経ったが

毎日、毎時間自習が続いていた。

そして今日も「今日も自習なあゝ」とグレンが言う

クラスの生徒全員に静寂が訪れ、もうたつぷり数十秒経つと

「ちよつと待てえええええええ」とシステイがキレ、教科書をグレンへ投げ飛ばした。

その一方学院長室では

「どうかお考え直しく下さい、学院長！」とハーゲイ……もとい、ハーレイ先生が言う
と

「彼らの採用は、セリカ君たつての要望だからのおゝ」とリック学院長が返すと

「あの魔女の進言を了承されたのですか？」

「グレンとやらは、魔力容量キャパシテイも意識容量メモリも普通、

系統適正もすべて平凡、良くも悪くも普通の魔術師……いや、基礎能力だけでは
中の下かの。

ヒロはさすがセリカ君の息子じやの、基礎能力だけでは上の中……上の上かのゝ」と

言うところ

「グレンは第三階梯^{トレデ}、ヒロは第六階梯^{セーデ}ではありませんが

あのやる気のなさでは生徒たちがかわいそうです」

学院長が再び経歴を見ると「ふむ、彼らは魔術学院^{マジック}卒業生なのか」

ハーレイが「なぜ学院長は二つ返事で採用を決めたのですか？」

「そりゃあ、だって、ほら、セリカ君が推薦してくれたんじやろ、なんか面白い事、やってくれるような気がせんか？」

「しません。あの魔女を過大評価しすぎです、あの魔女は過去の栄光にしがみつ

守るべき秩序を破壊する旧時代の老害です」

すると「言ってくれるじゃないか、ハーレイ」

突然響き渡った何気ない声にハーレイは凍り付いた

「あの鼻たれ小僧がまあ、随分と偉くなったもんだ。私は嬉しいぞ？」

「・・・いつからいた、セリカⅡアルフォニア・・・」

「さ、いつからだろうな？先生からデキの悪くい生徒に問題だ、当ててみな」

「転移の術、時間操作、・・・そんなバカな・・・魔力の波動も、世界変則の変動も感じなかつた」

「はい、不正解。お前三流だよ、精進しな」

「ごきげんよう、学院長」と優雅にセリカが挨拶した。

「おお、セリカ君。相変わらず美しいの」

「ふふふ、学院長もまだまだ若くて素敵だぞ」

「そうか、ならば今晚の相手をしてくれぬか」とリックが笑いながら言うと

「あはは、お断りだ。てか相変わらずお盛んだな。そろそろ枯れるよ」とセリカが返すと
「ふははは！わしは生涯現役よ！」と笑いながら返した

そんな温い空気をハーレイが机を叩き吹き飛ばす

「私は認めん、セリカ！アルフォネア。あのような愚物を講師にするのは絶対認めん」

「・・・取り消せ」とセリカがキレてしまい

「別にお前が私のことを悪く言おうが勝手だが、私の前で彼奴らを悪く言うのは許さん。
取り消せ」

「な、にを・・・グレンとヒロという男が・・・取るに足らない三流魔術師である・・・
のは事実であろう」

と脂汗を流しながら声を絞り出した。

「お前にこれが受けられるか？」とセリカが自身の左手に嵌めていた手袋を取ろうとす
ると

「わ、わかった．．．取り消す．．．私が．．．悪かった．．．」と言い部屋から出て行った

それを学院長が見て

「やれやれ、相変わらずおてんばじゃのお、部屋が吹き飛ばか冷や冷やしたわい」と言い、続けて

「だが、セリカ君、今回のことは君の差し金であつても無茶だよ」

「．．．わかつている。本当にすまない」と言い

「あいつらの責任は私が取るさ。あいつらには、ただ、生き生きして欲しいだけなのさ」

その頃、教室では

「うわー、見ろよ、ロッド、あの講師を」

「ああ、スゲエな．．．目が死んでる．．．」

「あんなに生き生きとしていない人を見るのは初めてだ．．．」と教室の至る所から響く声

「で〜多分、こうだから〜きつと、こんな感じで〜で〜大体、こうで〜」とな

んともやる気のないグレン

そして「おおこの人ナイスボディージャン。一目だけでもいいから拝みたいもんだぜ」

と教室の端で座ってエロ本を読むヒロ

「ああ、ヒューイ先生は良かったなあ〜」

「ヒューイ先生なんで辞めちゃったんだろ……」と言われグレンたちの授業は最悪なものであった。

それからはグレンの書く字が汚すぎて板書できず、理解できる者はいなかった。

それでもごくわずかに、最低な授業から何か得ようとする生徒もいた。

「あの、先生……質問があるんですけど……」と小柄で小動物のような女生徒が言った。

「なんだ？言ってみな」と言われ先ほど分からなかった語訳を教えて欲しいと言ったが「ふつ、俺も知らん」

「待ってください、先生。生徒の質問に答えてあげるのが先生じゃないんですか？」とい

ライラしながらシステイが言うと

「分からない物をどうやっておしえればいいんだよ?」

「生徒の質問に答えられらいのであれば後日調べて、答えてあげればいいじゃないですか」とまた言い合いが始まった。

流石にこれ以上はマズいと思ったのかヒロが

「よし、リン、どこが分からないんだ。俺でよければ答えてやるよ」と言いその場は収まった。

それからグレンの初授業終了後、女子更衣室にて

「まったくもう、なんなのあいつ」とシステイがぼやく、更に

「ねえ、ユウナ、あなた先生達のこと知っていきそうだったけど、何か知っているの?」

ユウナは尋ねられたが言おうか迷っていると、他の女性陣が

「テレサ、あなたいつの間にな」とウエンデイが言い

「うふふ、成長期ですから」と勝ち誇ったように返すと、
周りを見れば同じような光景が広がっていた。

しばらくすると「あーめんどくせえ、別に着替える必要なんかねえだろ．．．セリカのやつ」

とグレンが言いながら更衣室に入ってきて、システイ、ルミア、ユウナ3人と目が合った。

しばらく沈黙の後「．．．あー」とグレンが周りを見渡し外のプレートを見ると「昔と違うんだな、ここは男子更衣室だったのに」と言い

「これが最近、帝都で流行っている青少年向け小説のラッキースケベってやつか。

あー待て。お前ら落ち着け。俺は常日頃、こんなお約束展開について物申したかったんだ」

「俺、思うんだが．．．女性の裸をチラッと一目見るとボコられるのが等価交換だなんて割りに合わねえだろ?。」

だから、俺は．．．この光景を目に焼き付け．．．そうだろ．．．ヒロ?

すると天井から不気味な笑い声が聞こえ

「そうだと、我が同志よ。．．．俺もこの光景を目に焼き付ける!!」と2人で凝視すると

「「この．．．ヘンタイ」とクラスの女子にボコられる情けない先生であった。

その後、2年2組の女子生徒による、とある魔術講師達への悲惨な暴力事件が発生したのであった。

その後、2人で食堂へ歩いていると

「痛ってえー、普通あそこまでやるか?」

「本当だぜ。あーあ、頭にコブまで出来て、目も開かなくて見えないし」とボコボコにされた2人が話していた。

「しっかし、最近のガキは発育が良いな。何食ったらあんなに育つんだ?」とグレンが言い

「さあな。しかし、ユウナは発育が良好で良かったじゃないか、グレン?」とニヤニヤしながら言う

「うっせーよ。あいつだって良い体してるじゃねーか」とグレンが返すと

「バカ野郎、……あいつをそんな目で見たことねえよ」とヒロが返す

「別に隠さなくたって、普段のお前を見てれば分かるよ。……好きなんだろ？」と言われ

照れを誤魔化しながら「そんなんじゃないやねえよ」とグレンの頭を叩いた。

そして2人で「ルミア、……良い体してたなあー」と言った。

食堂でそれぞれ大盛りを注文し席を探していると、ちょうど良いところが開いていたので

「よっ！邪魔するぞ」とシステイ達がいる席へ座った。

すると「あ、貴方たちは」

「………違います、人違いです」華麗にスルーされるシステイであった。

それから皿のカチャカチャ言う音だけが聞こえてくのであったが、ルミアがこの沈黙を破り

「あの、……先生方は随分とたくさん食べられるのですね」

「まあ、食事は数少ない娯楽の1つだからな」

するとユウナが「グレン先生の炒め物美味しそうですね」と言う

ルミアも「ヒロ先生の野菜も美味しそうですね」笑顔で言い

グレンが「わかるか？ちよどここの時期にキルア豆の新豆が入荷するんだ」

ユウナが「そうなの？じゃあ今度、私も食べてみようかな？」と言ったが

「一口食ってみるか？」とグレンが言い

先程からヒロの野菜を食べたそうに見ているルミアを見てヒロも

「……ルミアも一口食べてみるか？」と聞くと、ニパアとルミアは笑顔を浮かべ

「……いいんですか？……でも間接キスになっちゃいますよ？」

「……ふん、……ルミアなら喜んで！」とヒロが言ったが、それを面白くないシス

ティが

「……ふーんだ、ルミアにデレデレしちゃって」と言い、ユウナも

「……お姉ちゃんに報告しなきゃ」と悪魔の笑顔を浮かべていた。

「……ユウナさん、ごめんなさい。それだけは勘弁してください」と謝るヒロであった。

それから物々交換し食べているとグレンが

「……そこのお前、それだけで足りるのか？」と聞き、ヒロも

「そうだと、成長期なんだから食わないと育たないぞ」とシステイの胸を見ながら言うのと殴られた。

「余計なお世話です。午後の授業が眠くなるから食べないだけです。」

まあ、先生には関係ないことですが」と言う

「……回りくどいな。言いたいことがあるなら、はつきり言ったらどうだ？」

「……分かりました。この際はつきりと言わせてもらいます、私は」と言おうとした瞬間

「お前も食いたいんだろ？……まったく、このいやしんぼめ」と口に食い物を2つ突っ込まれた。

「……ち、違います。私が言いたいのはそのなことじゃなくて」

「代わりにそつちも少しよこせ」とグレンにスコーンを取られ、ヒロにもシステイが一口食べた方を取られ

「ああー!!? 何、勝手に取ってるのよ」怒ったが

「等価交換だ！」と言われ

「ど・こ・が、等価交換なのよー。ちよつとそこに直りなさい」とシステイを怒らせ
「うわっ！ちよ、ちよつと、食事中はお静かに願いますうー」とチャンバラが始まった。

それから数日後

「いい加減にしてください」とシステイが言うと

「だからいい加減にやってるだろ？あんま怒ると白髪増えるぞ？」と呑気に返すとグレンに

「誰が怒らせていると思ってるんですか!!?」

「ほら、そんな怒るからその歳で白髪だらけじゃないか・・・可哀想に」

「これは白髪じゃなくて銀髪です。・・・先生方が授業に対する態度を改めないなら

こっちにも考えがあります！」

「・・・えっ!!?マジで!!?」

「私は、この学院に多少なり影響力を持つフィーベル家の娘です。」

お父様に進言すれば貴方たちの進退を決することもできます」

「よかつたな、グレン。これで俺たち1ヶ月待たずに辞められるぞ！システイ、……ありがとう」

「……本当にありがと、白髪のお嬢さん」と涙ながらに抱き合つて喜ぶ2人を見て

システイは「あ、貴方たちと言う人は」とキレて手袋を投げた。

「痛つてえー」

「貴方たちにそれが受けられますか？」

グレンが「……お前、マジか？」

「私は本気で本気です」とシステイが返す

するとルミアが「シ、システイ！ダメ！早く先生たちに謝つて、手袋を拾つて」と言うが、システイは動かさず

グレンが「……お前、何が望みだ？」

「授業態度を改め、真面目に授業してください」

ヒロが「お前が要求するってことは、俺もお前に何でも要求していいってこと、失念してないか？」

「承知の上です」

「お前、馬鹿だろ。嫁入り前の生娘が何言ってるんだよ、両親が泣くぞ？」とヒロに言われ「それでも、私は魔術の名門フィーベル家次期当主として、貴方たちを見逃すわけにはいきません」

グレンが「いいぜ、その決闘受けてやる。

ただし、この決闘は「シヨック・ボルト」のみだ。ケガさせたら悪いしな」

そこでヒロが「ちよつと待った！俺に受けさせてくれよ、グレン。早く辞めたいんだから」

「ダメだ。俺がやる」とシステイの手袋を取り合い、俺だ、俺だと喧嘩が始まった。

最終的にはじゃんけんでグレンが勝ったため、グレンが戦うことになったが、

負けた場合はヒロが引き継ぐ形で終止符が打たれた。

「ほら、決闘やるんだろ？中庭行くぞ」とクラス全員で決闘の行く末を見守るため移動することになった。

移動後、グレンとシステイが対峙する形で向かい合い、その他は離れて見守っている。

しかし、ヒロはどっちが勝つか分かっていないかのようになり、一人笑いを堪えていた。

「いいぜ、いつでも来な」とかつこよく決めたが外野から

「負けたら、セリカが泣くぞー」と水を差され

「ちよつと、やめてよね、人がせつかくかつこよく決めてるのに」と言い返した。

シヨック・ボルトの撃ち合いの決闘は、いかにして相手より早く発動できるかが、勝負のカギとなる。

システイーナは覚悟を決め「《雷精らいせいの紫電しでんよ》とシヨック・ボルトを指先から放った。

クラスのみんなは、グレンの余裕そうな顔を見てどうするのか、固唾を飲んで見守っていた。・・・が

「ぎやややややー」とまともに受け、システイは自分がルールを間違えたのかと思
い、

他のクラスメイトは、啞然としており、ヒロに至っては、腹を抱えて大爆笑していた。

グレンは痙攣しているのかしばらく動かず、やっと回復したと思った第一声に

「ひ、卑怯な……。」と言い

復活したグレンを見て「あ、先生」とシステイが言う

「準備できてないのに、不意打ちとは、それでも誇り高き魔術師か!？」とグレンが負け惜しみ言うが

その後、何本も勝負するがグレンは三節詠唱、システイは一節詠唱が出来るため、勝負は明らかであった。

そしてクラスの生徒はあの結論に至った。

「(先生、一節詠唱出来ないんだ!!)」と

拳句の果てにはそんな約束は知らないと言い走って逃げていった。

それを見てヒロは「……ユウナ、治療を頼む」と言ってグレンのもとへ向かわせた。それから「よし第二ラウンドだ。使う魔術はなんでもOKでいいか?」と聞くと

システイは「……なんでもって所はちよつと癪だけど、いいわ」と言いヒロとシステイの決闘が始まった。……が

勝負は一方的だった。

「雷精の『吠えよ炎獅子』……」とシステイより早く呪文を唱えると、グレンと戦った時とは別次元の威力の呪文が発動した。

システイは、間一髪で避けたが何が起こったのかシステイも含めクラスメイトの誰も

が分からなかった。

しかし、この呪文が軍用攻撃魔術《ブレイズ・バースト》であることはわかった。

それからも一方的に軍用魔術を使いシステイを消し炭にしようとしていた。

そこでみんなが思った「(こいつは、鬼畜だ!!)」と。

「ちよつと、ヒロ、軍用魔術を使うなんて卑怯よ」とシステイは言うが

「何でもありつ了承したのはお前だろ。あと、決闘は全力でつてママから教えられてい
るんだよ」と言い

逃げ回るシステイに止めの一撃、《ライトニング・ピアス》を撃ち込んだ。とても威力
を落として。

システイはなんとか避けたが、勝ち目がないので降参した。

ヒロはガッツポーズを決め喜んでいたが、周りの生徒は、こいつには決闘を挑まないと心に誓ったのであった。

それからまたやる気のない授業が始まったが、ここで問題が起きた。

リンがグレンに質問したが、この前のように適当に返しシステイを怒らせた。

「無駄よ、リン。その男は魔術の崇高さを全く理解していないわ」と言うどグレンが

「ふーん。魔術ってそんなに偉大で崇高なもんかねー？」と返した

それから言い合いが続き、ついにグレンが言ってしまった。

「ああ、魔術はすげえ役に立つよ……人殺しにな」と

「お前らの好きな魔術が、二百年前の『魔導大戦』、四十年前の『奉神戦争』で一体何をやらかした？」と言い

さすがにこれ以上はやばいと思ったヒロは「お、おい、グレン」と続きを言おうとしたがグレンは止まらず

「まったく俺はお前らの気が知れねえよ。こんな人殺し以外、なんの役にも立たない術を勉強するなんてな。

こんな下らんこと人生費やすなら他にもっとマシな……」と言いかけたところでシステイがグレンを叩いた。

「いつ……てめえ!？」

「違う……もの……魔術は……そんなんじゃ……ない……もの」と泣きながらシステイが言い

「なんで・・・そんな・・・ひどいことばかり言うの？・・・大嫌い、貴方なんか」と言い教室から飛び出していった。

「・・・つち」と苦虫を噛み潰したような顔をし、ヒロはやってしまったという顔をしていた。

ヒロが「すまない、みんな、今日は自習にするから」と言い、グレンが出ていきヒロが後を追おうとしたが

ユウナが私が行きますと言い、ルミアからはシステイをお願いしますと言われたのであった。

ヒロは頭を掻きながら、考え、了承して、システイを追いかけた。

この後、システイたちはどうなるのか？

T o b e c o n t i n u e d

ほんの少しのやる気

あれから、ヒロはシステイを、ユウナはグレンを探していたが見つからず、夕方になつてしたが、

ユウナはバルコニーにいるグレンを見つけ近付こうとしていたが、

「……やっぱり俺、ここに居るべきじゃないな。セリカにや悪いが、帰ったら土下座の練習だな」とグレンが呟いていた。

「……グレン先生、ちよつといいですか？」とユウナがシステイの魔術に対する思いを語ることを決心し話しかけた。

システイは祖父との約束で、メルガリウスの天空城の謎を解くと祖父と約束したことと。

祖父から教えてもらった魔術が祖父との絆を感じられること、

そして今は、ユウナやセリカ、ヒロしか知らない、グレンは本当は魔術が好きである事を言った。

そして「ちゃんと明日、謝ってあげてくださいね!!?」ステイ泣いてたから」
グレンは何も反応しなかったが、顔は笑っていた。

一方、ヒロはまだ校舎内を探していると、反対側の校舎の教室に人の影が見えたので遠見の呪文〔アキュレイト・スコープ〕を発動させ見た。

「あの金髪は、・・・ルミアか?」と何をやっているのか見てみると
ルーン文字を五芒星の内外に書き連ね、方陣を構築しようとしていたが、上手くいっていなかった。

ヒロは息抜きも兼ねて「・・・よしっ!」と言って冷やかすついでにレクチャーしに行った。

ルミアは出来ずに思い悩んでいるといきなり扉がバンツと開けられ驚いた。

「ヒ、ヒロ先生!!? どうしてここに?」

「ばーか。それはこっちのセリフだ。生徒による実験室の個人使用は原則禁止だろ?」

「ご、ごめんなさい! 私、法陣が苦手で授業についていけなくて・・・、

いつも教えてくれるシステイがいなくて、1人でやっていたんです」

「ごめんなさい! 今すぐ片付けますね」と言い片付けようとしたが

「いや、いい。もう少しで完成じゃないか。崩すのはもったいないだろ？」と笑顔で返し「で、でも・・・上手くいかなくて、どの道諦めるつもりだったんです。どうしてだろ？前は上手くいっていたのに」

「ばーか、水銀が足りてないんだよ」

ルミアは「えっ！」と驚いていたが、ヒロは何の躊躇いもなく水銀が入っている壺を取り

ルミアが構築した法陣をなぞった。ルミアは普段はあんなにやる気のないヒロがここまでの手際で出来ることに驚いていた。

「よし！もう一回起動してみな。教科書通り五節でな。省略するなよ？」

《廻れ・廻れ・原初の命よ・理の円環にて・道を為せ》と呪文を唱えると

7つの光と銀が織り成す幻想的な景色にルミアは思わず

「うわあく、綺麗・・・」 呟いていた。

「そんな感激するものか？コレ」

「だって・・・今まで見た誰よりも魔力の光が鮮やかで、繊細で力強くて・・・先生って凄いい・・・」

「馬鹿言え。こんなの誰にでも出来る。それに、これを組んだのはほとんどルミアだ。」

ルミアが精製した素材や触媒が良かったんだよ、きつと」と言い、ルミアの頭を撫でた。

ルミアは昔を思い出し、悪い気にはならず、むしろ気持ち良さそうに目を細めていたが、その幸福な時も終わった。

「じゃ、俺帰るわ」

「あ……ちよ、ちよつと待つてください」

「どうしたんだ？」

「ええと……そうだ、先生、今から帰るんですよね？……途中まで一緒に帰りませんか？」と笑顔で言ったが

「……やだ」と言われルミアは少し拗ねたが、すぐに

「……ぶつ。……冗談だよ。一緒に帰ろう。なんなら手も繋ぐか？」

「もうっ！……茶化さないでください！急いで片付けるの待つてくださいね？」と涙目になりながら言った。

それから2人は学院を出て、ルミアの昔話を聞き、ある人物に助けてもらった事を感じ謝している事と

なかなかハードな人生を送って来たことを知ったヒロであった。そしてヒロは何か重要な事を忘れていたような気がした。

それから夜になり、システイはメルガリウスの天空城の見える丘に来ており、思い悩んでいた。

しばらくすると、システイの後ろから犬の鳴き声が聞こえて振り返ると白い犬がシステイの足元で戯れていた。

システイは飼い主がいまいか辺りを見回すと、

「よっ！」と後ろから声をかけられ声をかけられ、驚いて転んだ。

「……もう、誰よ！」と見上げると、手を差し伸べているヒロがいた。

「大丈夫か？」と言われながら起きあげてもらい、システイは顔を赤くしていた。

「この子、ヒロの犬？」

「そうだよ。散歩中にどっか行っちゃったから、探してたんだよ。捕まえてくれてサンキュな」

それからたわいもない話をしてしていると、ヒロがあの手を話し始めた。

「システイ……グレンのことなんだが……」と言いかけると

「……何よ、あんたもあいつの味方するの？人の気持ちも知らないで！」

「落ち着けシステイ、別に味方するんじゃないよ、なんであいつがあんな事言ったか説明しようと思つて

あの後、お前のこと探していたんだぞ？」と言われシステイは心配してくれて探してくれていたことが

嬉しくて、頬を朱に染めていて、ヒロのことをまともに見ることが出来なかった。

「今から、ある人物たちの昔話をするから、よく聞くんぞ？」と言われシステイは首を縦に振った。

「そいつらは、物心つく頃には既に魔術が大好きで勉強熱心で、出来なければ出来るまで練習して、

出来るようになったら魔術の先生に見せて、褒めてもらって、それが嬉しくて……」と話していると

「……それってあな『いいから、聞く』……はい」と制されしまった。

「それで、飛び級で魔術学院に入学して、幼い頃読んでいた、

正義の魔法使いの本のような魔術師になりたくて、一生懸命で、卒業して、

帝国のある魔術団に入って、仕事しているうちに、本当にこれがやりたかった事なのか？

これが本当に正義の魔法使いになれるのかと疑うようになった。

・・・そして1年前、とある事件が起きて・・・1人はそれで魔術が嫌いになり、

1人は大事な人を守るために体を張って傷つき・・・そうやって魔術の闇の部分をとくさん見て来た。

だから、そいつらは魔術が大嫌いになった」と言い、ヒロは気を暗くしていた。

システイはこの話を聞き、自分の知らない魔術の裏の顔をその人たちは見て来たのだと気付き

自分の言動が浅はかであった事を悔いたのであった。

それからヒロは「だから、もし、あいつが謝って来たら許してやってほしい。

お前の叔父さんの事は知らなかったんだし、あいつも言いすぎたと悔いているよ」と言い、ヒロは頭を下げた。

「よし、暗い話はこれくらいにして帰るぞ。夜更かしは女の敵だぞ。

あとない物が余計に育たないぞ」と、余計な一言を言ってしまい、良い雰囲気だったのをぶち壊し、

「……あんたは……いつも……いつも……一言余計……よっ！」

「ワンツ、ワンツ」とシステイと自分の愛犬に殴られては噛み付かれ、何とも酷い顔をしていたが、

システイは「……でも……ありがと！いろいろ心配かけて。もう大丈夫よ」と言い小走りで駆けて行った。

その後、ヒロは更にある人物にボコボコにされ、次の朝、ルミアに治してもらったのであった。

次の朝、教室にて、

システイとグレンは対峙しており、クラスのみんなは、また昨日のような喧嘩が始まるのかと思っていたが

グレンが頭を下げて謝った事と、システイがすんなりと許したことに、クラスメイト

は面食らっていたが、

ルミアとユウナは笑顔で、無事解決した事をよろこんでいた。

そして次の一言で、システイ含め生徒全員驚くのであった。

「よし、お前ら・・・授業始めるぞ」と言いクラス中騒めいていた。

「さて・・・と、これが教科書・・・だっけ?・・・いらんな」と言い外へ投げ捨てた。それから、手始めに「シヨック・ボルト」についての講義が始まった。

「【シヨック・ボルト】の詠唱は、《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》だよな」と言い、実際にグレンが三節詠唱で発動して見せた。

「これが、魔力を操るのに長けたやつなら・・・そうだな、俺の助手にやってもらおう」
はいはいと言いながらグレンの方へ手を向け、「《雷精の紫電よ》」とヒロは呪文は発動した。

もちろんグレンはシヨック・ボルトを受け止めて、

「・・・テメエー、やりやがったな。《雷精よ・紫電の衝撃『雷精の紫電よ』』と喧嘩が始まったがどちらが勝つかは明白である。

しばらく経った後、

ボロボロになったグレンは「・・・と、まあ、詠唱を四節にするとどうなる？」

聞かれた生徒たちは誰も答えられず、講師2人は床で笑い転がっていた。

最終的にウエンデイがランダムと答えたが

「答えは・・・右に曲がる・・・だ」と言い、的中した。

それから、五節や詠唱の文字を一部消して唱えるなど、グレンが言った事は全て的中した。

「何？たかが言葉ごときが人の深層意識を変えられるわけがないって？・・・よし、ヒロ、あれやるぞ『りよーかい』」と言い

それぞれ、ユウナ、システイの前へ移動し、

「ユウナ・・・愛している、実は一目見た時からお前に惚れていた」

『システイ・・・昔からずっと好きだったんだ・・・結婚してくれ』と2人揃って告白やプロポーズする次第で

クラスの女子は、きやーや顔を赤らめる者、1人は目のハイライトが消えヒロを睨みつけている者、

男子に至っては、死ぬこのクズ講師やリア充爆ぜろなど様々な意見である。

ネタバレすると「はい、注目！2人の顔が真っ赤になりましたねえー。

見事言葉ごときが意識に何らかの影響を与えましたねー」と言つて、2人は満足げに
回れ右して

戻つていくと、「……『こんのお、ばかあああああああ』……」と言つて教
科書を投げた。

それからしばらくは賑やかな授業になり、グレンは講義をし、ヒロは理解できない者
の所へ行き説明すると言う構図が出来ていた。

瞬く間に、2人の授業の評判は他のクラスへ拡がり、クラスへは入りきれないほどの
生徒で溢れていた。

例えば、「時間だな、じゃ、これまで……はあー疲れた」と言い黒板を消し始めると
「あ、先生待つて！まだ消さないでください。私、板書取つてないんです」とシステイは
手をあげるが

ヒロがニヤリと笑い、グレンとアイコンタクトを取り

「ふはははははははは……もう半分くらい消えたぞ!!?ざまあシステイ」とヒロは

システイへ言い

「あんたは、子供か！」と教科書を投げなれ見事、顔にめり込んだ。

ある日は、授業が終わりグレンとヒロが沢山の本を抱えて出て行くこうとするとルミアとユウナが『あ！先生、手伝います』と言って駆け寄ってきた。

グレンとヒロはそれぞれに2、3冊ずつ渡して運ぼうとすると、遅れてシステイが「私も手伝うわ」と言ったところで

「またもやニヤリ顔をし、『じゃ、よろしく！』と2人に全部の本を押し付けられ前が見えないでいた。

「な、なによ、あんたたち！ルミアとユウナとじゃ扱いが違うじゃない！」と怒っている

と
グレンが「ユウナは可愛い、ルミアは癒し、お前は生意気」と言い

ヒロは「ユウナは優しい、ルミアは女神で巨乳、お前は生意気で貧乳」と言い

システイが「……ヒロは殺すわ」と言い本を落とし、リアル鬼ごっこが始まった。

それからとある放課後、2人で黄昏ていると

「おー、おー、夕日に向かって黄昏ちゃって、青春してるねえ〜」茶化すようにセリカが

言ってきた。

「・・・何しにきたんだよ、セリカ」

「おいおい、母親が愛息子を見にきたらダメなのか？」と言いなながら自分の谷間へヒロを埋めていた。

「私は明日から学会で帝都オルランドへ行く。留守の間ここを頼むぞ・・・2人とも。

それとヒロ、・・・しばらく会えないんだ、今晚・・・待っているぞ」と意味深な事を言うセリカであつたが

「・・・よし、溜まりに溜まった物を今晚はぶち撒けるぞ」と意気込むヒロであり、セリカは「ほどほどに頼むぞ」と雌の顔をしていた。

すると、

「あーやつぱりここにいた、先生！」と3人が手を振って寄ってきた。

グレンが「どうしたお前ら？帰ったんじゃないのか」と言う

ルミアが「図書館で板書の写し合いをしていたんですけど、先生たちに聞きたい事があるって・・・ユウナとシステイが」と答え

『それは言わないって約束でしょ、裏切り者!』と吠えていた

「ヒロ先生、私も聞いてもいいですか?」と聞いてきたので「もちろん」と答えると

つかさずシステイも「あ、わたs『やだ!』……まだ何も言っていないでしょ。何なのよこの扱いの差は!」

「ユウナは優しい、ルミアは女神、お前は……愛してる」と言う

いつもと返ってくる返事が違い、システイは毛先をくるくると指でまわしながら、

「あ、あんた……何言ってるのよ!」と照れていたが

「……嘘に決まってるんじゃない、ふはははは」と笑っていると鳩尾にシステイの拳がめり込んでいた。

その後、なんだかんだ言いながらも仲良く帰っていき、セリカはその後ろ姿を見て安心していた。

が、魔術学院に魔の手が迫っていることには誰も知る由もなかったのである。

その晩、しっかりとセリカの屋敷に帰ってきたヒロはそのまま一緒に風呂へ入り、上がった後は

セリカをお姫様抱っこして寝室へ行き、親子の絆を深めたのであった。

その晩、セリカの屋敷から男女の卑猥な声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

T o b e c o n t i n u e d

愚者と世界と黒い死神

次の朝、2年2組は授業が遅れていることもあり授業がある。

「うおおおおお、遅刻遅刻ー」とグレンは寝坊して急いでいた。

そして、ヒロもまた「やべええええー、遅刻だああああー、システイに殺されるー」と言いながら全速力ダツシユしていた。

「それもそのはず、前夜は、セリカの誘いもあり夜遅くまで激しい運動をしていたのである。（ベットが壊れたらしい）」

そして、広場では待ち合わせをしたわけではないが、2人は合流したが、ここで異変に気付く。

「……おい、休日なのに静かすぎないか？」とグレンは言い、

ヒロも「……確かに、いつもは人が溢れて賑やかなのにな」と警戒を強めた。

2人は物陰に誰かいるのに気づき、グレンが

「……出てきな、そこにいるのは分かっている」と言うと、物陰から一人の青年が

出てきた。

「ほう、わかりましたか？ たかが第三階梯^{トレデ}と侮^ヒつていましたが、なかなか鋭いですね」
ヒロが「・・・どなたですか？ 用がないのならどいてくれません？ 俺たち急いでいるので」

すると突然、男が、「《穢れよ・爛れよ―》と不意に呪文を唱えた。

2人は、『・・・や、やべえ!』と言って方陣の光で消えていった。

その頃、教室では

「・・・遅い、遅すぎるわ。あいつら、今日、授業なの忘れてんじやないでしょうね？」
とシステイは痺れを切らしていた。

その後しばらくすると、不意に扉が開かれ、2人が来たと思つたシステイは

「・・・遅いわよ、貴方たち！」と言つたが、入つてきた男たちは知らない男たちだった。

それから、男たちは、ルミアを探していた。

手始めにリンにジンはお前がルミアかと聞いたが、リンは答えず、システイが食つて

掛かると、ジンを怒らせ

《ライトニング・ピアス》が放たれようとした瞬間、ついにルミアは我慢ならず、自分がルミアと名乗り出た。

そしてルミアが「私は大丈夫・・・グレン先生・・・ヒロ先生が必ず助けに来てくれるわ」と言い連れていかれた。

その頃、町では、人々が、「あれはひどいな」や「あいつ、生きているのか」などと声が上がっていた。

人だかりの中心には、全身をボコボコに殴られた拳匂、素っ裸にひん剥かれているいる男性がいた。

身体には縛りプレイのように縛られており、顔面にはドブス、股間には極小と紙が貼られていた。

一方、ルミアはヒロの名前を呼び胸元で手を握っていた。

システイはと言うと、ジンに連れられ使われていない教室へと連れてこられていた。

両手は背中《マジック・ロープ》で縛られており、身動きが取れないでいた。

ユウナも、タンに連れ去られており強姦されそうになっていた。

システイは、ジンに辱められ、犯されそうになっていると、

ジンが「あーやべえー、勃って来たわ」と言うのと、

真横から、「……あー俺も勃って来たわー」と言うのとジンが

「……誰だ……お前？」と聞いてきたが

「……システイ……お前結構エロい下着つけてんだな」と言いシステイは我に返り

「こつち見るなあああああ」と蹴り倒した。夫婦漫才である。が、ハブられていらついていたジンは

キレて、ヒロに向けライトニング・ピアスを放った。

「ズドン」

が発動することがなかった。なぜなら

「《何それおいしいの?》」と訳の分からない言葉を言うとライトニング・ピアスは霧散していた。

ジンは舐められていることにイラつき

「ズドン」「ズドン」「ズドン」と三回唱えたが、ヒロもまた

「システイ」「愛してる」「結婚してくれ」とふざけて言ったが、発動し、当たることはなかった。

ジンは拳を握り殴りかかってきた。

しかし、ヒロは帝国式格闘術を極めており、相手にならなかった。

そして止めの、

「行くぞ……必殺……マジカル……☆キツク」と言いパンチし気絶させた。

最後にジンが「パンチじゃねえか」と言っていたが気にしない。

その頃、グレンも「俺の必殺、魔法の鉄拳マジカル☆パンチをお見舞いしてやるぜ」と言い……蹴り倒した。

システイの方へ戻り、

ヒロが「……やべえ、また勃ってきた。システイ……エロすぎ」と言い、システイは恥ずかしそうにヒロの股間を注視していた。

「ちよ、ちよつと、変態……こつち来ないでええええー」と縛られたままのシステイは逃げていた。

しかし、システイは嬉しそうであった。何故なら、他の人に比べ発育が遅れている自

分の身体でも、好きな人が欲情してくれたから。

ジンを素っ裸にし、縛り、股間に短小と紙が貼られていた。

すると突然、空間が揺らぎ、ボーン・ゴーレムが召喚された。

が、ルミアが攫われたことを知りヒロは焦っていた。

「……俺の将来の嫁があああああ」と言うのと、システイがつかさず

「何が……将来の嫁があああ……よ、裏切り者おとおお」とヒロを蹴り、ゴーレムごとぶっ飛ばした。

「おい……やめろ。変なものに目覚めそうになるから」とシステイに謝っていた。

それからは、イクステインクシオン・レイを使い道を開けグレンと合流したが、ユウナからテレサも攫われたことを聞かされると

ヒロは転移魔方陣のある塔へと急いでいった。

グレンはユウナ、システイと協力してレイクを撃破したのであった。

塔に着き、扉を開けるとテレサがシヨウに犯されそうになっていた。が

「お前ら……ロクでなしなうえに、人でなしだな。懲りずに、あつちでもこつちでも強姦かよ……羨ましいぞおおー」と言う

テレサは軽蔑した眼差しを向けていた。

「……やめて、テレサ……そんな目でこつち見ないで……先生死にたくなつちやう」と涙目になっていた。

その後無事に、シヨウを倒したが、魔力を酷使した影響でヒロはマナ欠乏症になっていた。

テレサは駆け寄りヒロに向け、白魔術《ライフ・アップ》を唱えていたが、その頃はヒロは気を失っていた。

しばらくしてヒロは目を覚ますと、頭の下に柔らかくて暖かい感触を感じていた。

よく見るとテレサが膝枕してくれており、下から見ればテレサの双丘が見え非常に眼福である。

「……ありがとう、テレサ。おかげでまた勃って来たよ」と言う

とテレサに思いつきり殴られました。

テレサには他のクラスメイトと合流するよう伝え、ヒロは転移方陣のある部屋へ向かったのであった。

「だあああああー、開けごまあああー」と言つてドアを突き破つてくるバカが一名来たのである。

「……先生、無事だったんですね。……よかつた」と涙ぐんでいる、ルミアだった。周りを見ると、イケメンの青年がおり

「お前が黒幕か？ただでさえイケメンなだけで罪なのに、これ以上罪重ねちゃつたらだめだろ」と言う

遅れてグレンも転移塔へとやつて来たのである。

それからグレンが、愚者の世界を発動すると、サクリファイスが発動してしまった。ルミアを救うには五層からなる方陣を解除していかなくてはならない。

ヒロは自分の手首を噛みちぎり、血を流し、黒魔《ブラッド・キャタライズ》を発動し

血で第一層目にルーン文字を書き始めた。

書き終えると、「《終えよ天鎖・静寂の基底・理の頸木は此処に解放すべし》と黒魔儀イレイズを発動し解除していった。

だがしかし、最後の1つの所でヒロは力尽きてしまい、グレンも助けたいが自分も体力の限界である事を分かっているため動けないでいた。

そして、「やっぱ・・・俺じゃ・・・無理だわな。ごめん、な・・・ルミア」と言いながらも

這い寄ってくるヒロを見てルミアも

「・・・先生・・・受け取ってください」とヒロの額に触れると、ルミアの身体が発光し、触れている場所が暖かかった。

そして、ヒロの体内には莫大な魔力が溢れていた。

「うおおおー、ルミアの処女は頂いたあああー・・・・・・じゃなくて、

いそがねえーと、やべえ、・・・間に合ええええー」とすんでのところで解除に成功した。

事が終わった後に、ユウナとシステイが来たが、ヒロが倒れているのを心配していたが、

ルミアが膝枕をして介抱していたので、事欠かずの済んだのである。

その後、2人の非常勤講師の活躍により学院へ、また平和が訪れたのであった。

この事件でヒロはしばらく動けないでいたが、放課後にはルミアやテレサにたつつつぷりと奉仕してもらい、

夜には、セリカがたつつつぷり奉仕してくれるので、そこまで苦ではなかった。

「うん………システイの下着はエロかったぞ。お兄ちゃんは嬉しいぞ!」

物陰で見っていたシステイは

「………うるさいつつつ………このお………変態………」と怪我を悪化させていた。

後日談

学院襲撃事件から数日経ったある日、グレン、ヒロ共に魔力の酷使で体に相当なダメージを受けていた。

グレンはすぐに治ると言われていたが、ヒロに至っては全身の骨折（3割はヒロインズの所為）で

包帯が全身に巻かれており、首から下が動かせてないでいた。

しばらくは2組の生徒が、テロの調査のため学院が休みの間は毎日のようにグレンやヒロのもとへお見舞いに来ていた。

中でもグレンにはユウナが、ヒロにはルミアやテレサ、システイとセリカが毎日来ていた。

グレンはセリカの屋敷に居候しているが、セリカがヒロの自宅で看病しており、グレン以外誰もいないじょうたいであったがユウナが、ほぼ住み込みで看病していた。

「先生」飯ですよ。アルフォネア教授が好きだけ食材を使っていいと

おっしゃったので、先生の好きな物を作ってみました」

グレンは一口食べると「・・・うまい、ユウナ・・・お前・・・いい嫁さんになれるな」と言う

ユウナは耳まで真っ赤にし俯いていた。

グレンもまともな飯を食べるのは久々であり、あつという間に食べ終わってしまった。

ユウナはグレンの食べっぷりを見て、また惚れ直したのであった。

グレンの1日は、昼ぐらいまで眠っているの、昼に起き、ユウナがご飯を作ってくれ

て
その後は、リハビリも兼ねてユウナや見舞いの来てくれた生徒たちと散歩や会話をし

夜になれば、ユウナとご飯を食べて、風呂に入りまた睡眠と言うサイクルである。

事件から2週間ほどでグレンは怪我が治り、職場へと復帰した。

一方ヒロは、全身打撲や骨折でしばらく職場に復帰できず、自宅療養していた。

学校が休みの間は、システイとルミアが朝早くから身の周りを世話をしてくれており、不自由なく過ごすことが出来ていたが、テレサが見舞いに来たりやセリカが帰つてくると

地獄の始まりであった。

ある時は、

システイがご飯を作ってくれたので食べようとすると、テレサが

「先生……今日……私お弁当作って来たのですが……」と上目遣いでこちらを見て来た。

弁当の本身は、肉や和え物、野菜など日によつて違うメニューではあるが、バランスの良い食事であった。

テレサは貿易商の娘であり、料理などした事が無かったが、あの事件以来、ヒ口に好意を持つようになり、花嫁修行と言つて母親から料理を習い始めたのだ。

「……せつかくテレサが作ってくれたから、今日はそつちを食べるよ」と言った。

手が動かせないので、いつもはルミアが食べさせてくれたが、それならばとテレサが食べさせてくれた。

その前にテレサとルミアで一悶着あったが、事なきを得た。

「……先生……どうですか……？」と聞かれ

「……お、美味しいよ？……うん……美味しい」と言った。

別に決して不味いわけではなく、習い始めたとはとても美味しのである。

しかし、普段システイが作ってくれる味はヒロの好みの薄味で味付けしてくれるためシステイがまずは、料理でリードしていた。

それから何気ない時にも、女の争いが勃発した。

まずは、テレサが飲み物を取りに行き、戻ってくる時にわざと躓き

ヒロの上へ覆い被さったのであった。

すると、ヒロの顔にテレサの豊満な双丘がめり込んでおり、ヒロは禁欲生活を余儀なくされており

溜まりの溜まっているのですぐに身体が反応してしまう。

「……先生、大丈夫ですか？」

「……ふあいひょうぶ」と話すと、テレサの胸にヒロの息が当たり、テレサが卑猥な声

をあげると

ヒロの相棒が反応し、それを見たシステイとルミアが急いで剥がしに行った。

ある時は、学校が終わった後にルミアが来てくれ、

お風呂に入れてくれたが、いつもはセリカが入れてくれるのだが、今日は何故かルミアに強制的に入れられた。

「……ルミア、その格好わ？」

「……その……変？……ですか？」と言われたが、ナイスバディなルミアなので「全然、変じゃないぞ。むしろ最高だ！」と言ったが、ルミアに笑いながら変態と言われてしまった。

それから、頭を洗ってくれ、体を洗ってくれている時に事件が起きた。

背中を洗い終わり、次は前を（ヒロはタオルで隠しているのでギリセーフ）と言う時に

ルミアが、床の泡で足を滑らせ、タオルが取れてしまい、生まれたままの姿でヒロに覆い被さっていた。

ラッキースケベである。この男、爆ぜるべきである。

ヒロは瞬時にある感触を感じとっていた。

(・・・ルミアの・・・コリつとしたものが・・・当たっている!!)
そしてルミアも、

(・・・先生の・・・固いのが・・・お尻に当たってる?)

「す、すまないルミア。大丈夫か？」

「は、はい先生。・・・あの・・・先生？お尻に先生の・・・固いのが・・・当たって

ます／＼／＼

「がああああー、すまない。今すぐ鎮めるから。煩惱退散、煩惱退散！」
その時、

『ああああああああー—————』……この変態、裏切り者おおー」と
声でしたので、

ブリキのような振り返ると、涙目でこちらを見ているシステイとテレサがいた。

なぜこの2人が遅れて来たかと言うと、

システイはグレンに仕事を押し付けられ遅れてしまい、テレサは一度、自宅へ帰り着
替えて来てから来ると

ヒロの家の前で偶然……そう偶然バツタリと出会ったのであった。

家へ入ると、ベットにヒロがおらず、ルミアもいないので探していると、

風呂の方から声が聞こえたので何事かと急いで駆け付けると今の状況である。

ヒロの上にルミアが跨っている……つまり2人は誤解しているのである。

「……、誤解だぞ！お前ら。……なっ！ルミア！」

さらにルミアが火に油を注いだ。

頬を赤らめ「……先生……激しかったですよ☒」など言うもので、

システイとテレサの《ゲイル・ブロウ》で彼方へと飛ばされたのであった。

ここでは、システイは素直になれず、テレサとルミアに遅れを取り、リードされていた。

ある日には、セリカ以外が帰った後にはセリカに風呂に入れてもらい、

上がった後には、セリカの色香の当てられ、反応してしまい、それを見たセリカに良いように扱かれたのであった。

怪我がだいぶ治つて来たある時、夜景が綺麗に見える丘で黄昏ていると、

「……ヒロ！」と言われたので振り向こうとしたが、叶わなかった。

何故なら、後ろからガツチリとホールドされているからだ。

「……よつ！……元気か？」と笑いながら言う

「それはこつちのセリフよ？」と返されてしまった。

「もう！あれだけ無茶しないでつて言ったのに、またこんなになつて……もう心配させないで！」と鳴かせてしまった。

「……すまない、○○」と言い向かい合い抱き返した。

しばらくヒロの胸で泣いた後、

「ねえヒロ？……任務から帰つて来て妹から聞いたけど

昔馴染みの子と教え子2人とセリカさんと、ナニしてたの？」と顔は笑っているがハイライトが消えた目で言われ

ヒロは冷や汗をかいて、（ユウナの野郎、チクリやがったな）

「……ナ、ナニモシテマセンヨ!?……ウン……ナニモ」と動揺を隠せなかった。

ふーんと見透かされたようにされたが、その後は特に追求してこなかった。

それからは何気ない日常の話に花を咲かせていたが、急に肩に頭が乗りかかって来たので

どうそたのかと見てみると、静かな寝息をたてて眠っていた。

そしてヒロは「……お前だけは……絶対……死んでも守るよ」と言って、頭を撫でた。

すると、嬉しそうに一瞬だが笑顔が見えた。

そして時は流れ、魔術競技祭へと移り変わるのであった。